（昭和五年五月二十四日第三種郵便物認可）

毎月一回十五日發行（定價一部五錢一年郵税共五十錢）

千曲時報

編輯兼發行人　須田圭二
長野縣上田市

發行所　上田蠶絲專門學校　千曲會
長野縣南佐久郡

印刷所　信濃毎日新聞株式會社

山本三六郎著
化學純絹絲の工業的完成　¥0.30

蠶絲科學研究會編
伊太利蠶絲絹業の衰退原因と其現況　¥1.50

菅原勇治著
改正蠶絲業法規要論　¥.2.30

發行所　市田上縣野長
蠶絲科學研究會
（振替長野6413番）

# 菅平の母校庇宇亭（ヒユッテ）

海拔四千餘尺、廣袤數方里、春は谷間の姫百合やさしく笑ひ、夏は牧場に牛馬三々五々逍遙し、秋は紅葉に目も覺むるばかり、又冬は雪の原となつて唯々白く美しの衣に泥る管平、かつては僅かの人々の賞美の的となつて居たが最近に於ては當所の開發に關する盡力と、世の潮流とによつて先づ第一にそのスキー場としての眞價を全國に認められ、避暑地保養地、遊覽地としての聲價は益々高められ廣く一般世間にその優秀なる素質を認めらるゝに至つた。

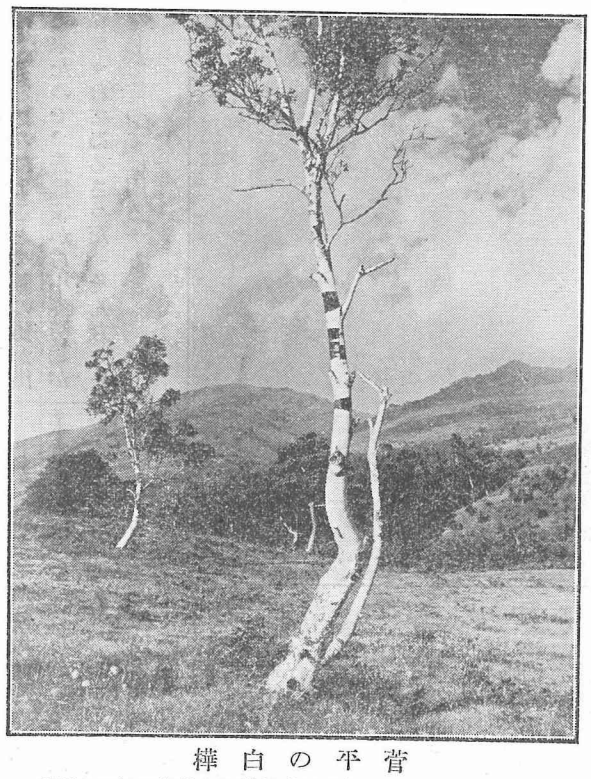
先般來上田溫泉電軌株式會社に於ては菅平ホテルを建設し、名古屋鐵道局に於ては山の家、日本齒科醫專はヒユッテ尙早稻田大學、法政大學に於てはラグビーの運動場を設けなどして夫々春夏秋冬の菅平を滿喫せんとして居る。

我が校は菅平のお膝元であり、春は鈴蘭採集夏はキヤンプ、秋は紅葉狩り、冬はスキーと一年中を通じて運動場の如く菅平を利用して居る。

かくの如く菅平は我が校にとつて實に有意義に利用され居る關係上、昨年度より既に菅平に庇宇亭建設の運動起り、今年度の豫算會議に議題として議せられしに一人の反對者もなく可決され、早速工事に着手し八月中旬竣工の運となつたものである。

今庇宇亭建設の費用概算を示せば次の如くである。

1 土地　八百十坪　金五百圓
2 建物　本館（洋館）建坪十五坪
　別館（日本間）建坪六坪
　物置　三坪
　以上建築費　約金七百圓
3 備附品　約金四百圓
　以上合計　金壹千六百圓也



菅平の白樺
（上田市伊勢町小林茂三郎氏撮影）

尙庇宇亭建設及び備付品の購入等は全部佐藤利一先生に一任してやつて戴いたもので、實に見事な什器が併かも非常に安く何一つとして不自由なき樣備へ付けられ皆樣の御利用をお待ちして居る次第である。

寫眞㈠は庇宇亭外觀の一部、㈡は內部を示す、今左に庇宇亭使用の假規定を記すと次の如くである。

上田蠶專庇宇亭使用假規定

一、庇宇亭は山岳部にて之を管理す

二、使用者の範圍

イ通常會員（本校學生）及び賛助會員（本校職員及び本校に緣故ある者）

ロ收容人員に餘裕ある場合には左記の者の使用を許可す

（一）賛助會員の家族

（二）特別會員（本校の卒業者及び修業者）

（三）其の他特に山岳部長の承認を得たる者

三、使用料金

庇宇亭の維持費として普通使用者より一人一回（一日）金五錢宿泊者より一泊金拾五錢（子供は金拾錢）の使用料を徵收す

四、使用者は豫め山岳部長より庇宇亭使用券の下附を求め該券を示して菅平ホテルより庇宇亭備付の鍵を借受け歸途戸締して鍵を菅平ホテルに返還すべし

五、使用者は任意自炊することを得庇宇亭には約十人分の自炊用具あり但し食料品は全部自ら準備するを要す

六、使用者は次の點に特に注意すべし

一使用者は庇宇亭備付の帳簿に毎回記名すること

二火の用心

三室內の土足を禁ず

四備付品を丁寧に取扱ひ食器その他は必ず掃除し置くこと若し器物を破壞したる際は速に自辨すること

五使用者は淸潔整頓を圖り自ら庇宇亭の內外を掃除すること

六電燈は歸途必ず消燈すること

七戸締を嚴重にし殊に歸途必ず戸締を忘れざること

七以上戸締火の用心その他の不注意に依りて生じたる損害は責任者が全部又は一部辨償の責に任ずること

以上

（北澤記す）

# 太るものは官廳

碓氷茂

雨が降る。實によく雨が降る。九月に這入つてから、雨の足を見ない日は誠に少ない。

よくも斯うあきもせずに降つたものだ。そして、おそらく夜店商人や屋外勞働者からは、どんなに厭られたかわかるまい。俺のやうな腰辨でさへも、どんなに憎らしいと思つたかしれない。

俺は雨が降ると憂鬱だ。ボロボロの靴を穿いてゐるから、雨の中を歩くと、忽ち靴の底がグシヤグシヤになつて了ふ。靴底から、氣持の惡い汁のニジミ上つて來るほど厭な思ひをすることは又とない。

こんな時には「オーバー・シユース」でもあればいゝなあ、と思ふ。だが然しすぐその後から「オーバー

シュースを買ふことが惜しいなア」といふ聲が追ひ掛けて來る。

× ×

十月一日から大東京市が出現する郊外の畑の中にある俺の巣も大東京市に編入されることになつた。

不景氣でも都會のズータイ丈けは妙に太る。

十月一日から三日まではその太りのお祝ひがある。俺の所へも提灯行列用の提灯が町會から配られた。

× ×

繭の値が上つたので、田舍にはいくらか景氣らしいものが出てゐるといふ噂だ。ところが、この景氣のおかげで、債權者の債權の取り立てが箆棒に急だといふことだ。殊に農銀勸銀等の取り立てと來たら目もあてられないといふ噂がある。

困つたものだ。結局太るものは斯うした類か。

× ×

俺が貧乏生活をしてゐることを本當にしてゐないものが隨分あるやうだ。「あいつはあんなことはいつてゐるが、隨分原稿料が這入るらしい」といつてゐるものがあるさうだ。この陽氣に、いつたいどの位の原稿料が年に這入ると思つてゐるのか。冗談も休み休み言つて貰ひ度いものだ。

正直のところ俺は漸く生きてゐる程度だ。いろいろな交際費は全部斷つてゐる狀態だ、さうしなけりや生きてゐられぬのだ。それでも毎月マイナスだ。ここ二年ほどの間に三百圓以上の借金をショッテ了つた。この借金をいつになつたら返すことが出來るだらうと思ふと頗る憂鬱だ。何？　嘘だと思ふ？　勝手に思つたらいゝだらう。

× ×

蠶が儲からぬ、といふので、農林省あたりで、盛んに小麥の奬勵をやつてゐる。ところが、最近新聞紙の傳ふるところによると、繭の値が出て來たので、養蠶家から小麥奬勵がウラマれてゐるさうだ。「そんなことをして貰つては困る」と。

繭の値が出て來ると直ぐさうだ。それも當然だ。儲かるものをやるが一番いゝから。

それは兎に角かうした出來ごとは、何れも價格の弄弄の結果だ。價格の亂舞がかかる現象を惹起させるのだ。だから問題は價格問題にある。

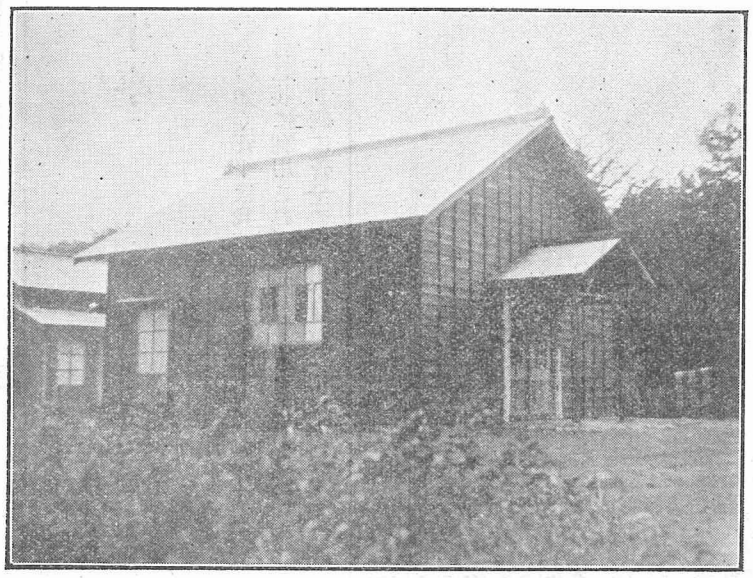
しかもかかる價格現象たるや、資本制社會以外には見られぬことだ。だから、われわれは、かかる現象を見るにつけても、現今の社會が如何なる機構を有してゐるかを認識することが最重要事なのだ。

×

不景氣になつて太るのは農林省と地方廳の一部だ。

成るほど官廳の太ることは、インテリ・ルンペンの失業救濟といふ意味では頗る結構だが、さうした役人を飼つておかねばならぬ國民殊に農民にとつては迷惑千萬この上なしだ。

（一九三・九・二六）



（一）庇宇亭の外觀

## 續々異端の目

蕉

プロパカンダ。親心喧嘩。

此の竝べ方は少し變だ。併し變な竝べ方が支那人のある特性を現すに最も適當だつたら仕方ない。

親が子を叱る。この場面を支那人は特に戸外に出て演ずる。――この點、吾々日本人と少し違ふ。

喧嘩する。お互ひ當事者同志の云ひ爭ひが却へつて第三者でしかない觀衆に向つてされる。相手が如何に不都合な奴だかを一般に知らせ樣とするのだ。傍人にとつて斯んなに迷惑な事はない。

國際聯盟に於ける支那の動き。吾々は外交官ぢやないが滿洲での生活體驗からアル鼻持ちならぬさ！　を感ずる。

### 慘虐無道。

匪賊に拉去された滿鐵、分水驛の驛長は近頃兩手の掌に孔を穿たれ、前喉部に穿たれた孔と紐で繫れたまゝアチ、コチと引き廻されて居ると云ふ。人質を有利に賣るためには先ず耳を、次に鼻を順次に削ぎ落して家族に送りつけると云ふのは彼れ等の常套手段とさえ云はれて居る。

歷史的に觀て斯んなやうな事が果して日本人の間にもあつたか何ふか、誰か私に知らして呉れませんか。

### 匪禍。

所謂、國際幹線鐵道に由つて釜山に上陸し、安東に渡つて北上する者に取つて乘客、卽ち其處の住民の衣服の色彩の變化を見ると面白い。人は朝鮮を白衣の國と云ひ滿洲を紺の國と云ふ。貧富、高下擧つて紺の衣服を纏ふ事はこの國を一種單調な冷たいものにする。

「美服を纏ふと云ふ事は富の程度を明示する事で從つて匪賊の狙ふ所となる譯だから」と說明する人がある。

大家族制、これは前に書いたがこれも對匪賊關係からだと說く人がある。

考へると滿洲の馬賊と云ふ奴も文化史、美術史と云ふ樣な分野にまで影響して居る事が知れる。怖るべし！　馬賊！

### 高粱と馬賊。

高粱の繁茂期と馬賊の跳梁期は完全に一致する。丈余の高粱の繁みが彼れ等の行動を完全に被覆するからだ。これを逆說的に云ふと高粱の栽培から馬賊が生れたので遠因は高粱栽培に適する氣候風土と云ふ奴にある。

で、馬賊は神樣が御創りになつたものなんだ。と云へる。

### 道を持たぬ國民。

「道路を持たぬ國民は道を持たぬ國民だ！　と云ふ箴言みたものをフト思ひ出した。作者は筆者なんだから間違へて眞物の箴言だと思はれては困るかも知れぬ。

卽ち道路を持たぬと云ふ事は公共心の欠乏を意味する。滿州には特に道路として構築されたものはない。人馬が通るからして路となるので雨が降つて水が流れゝば川が出來ると同樣。

例へば北海の洮滿其他の稍場末の市街を看よ！　人家は概ね對匪賊關係から高い土塀を圍らすが、この土塀の材料はその當然道路であるべき處から採る。筆者の旅中、丁度それは雨期の初めであつた故もあるが文字通り車軸を沒するは如何な事、水深六、七尺にも及ぶ所が而もそれが

問ひに對して「遼河には居るが此處には居ない」との答は將に旅のナンセンスであつたのである。

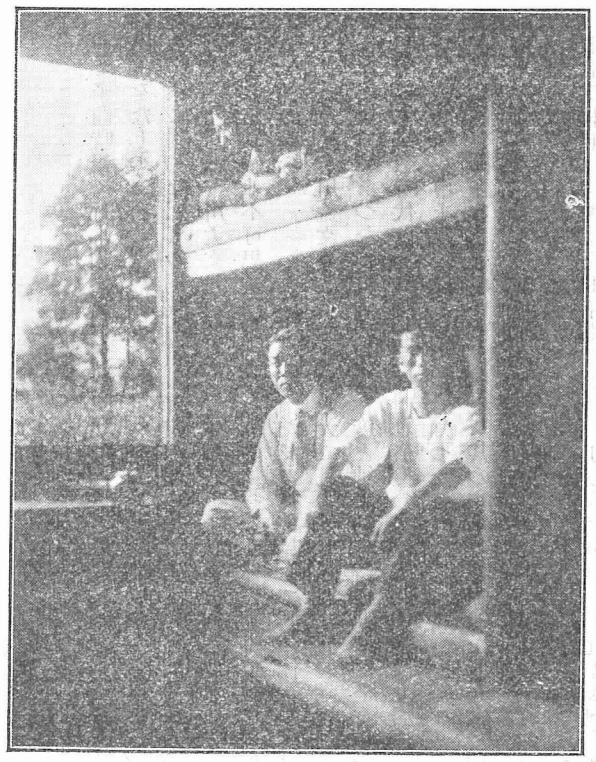
文化の喰ひ違ひ。

地震國に生れた筆者等は地震の際に起る地層の喰ひ違ひは恐ろしいものだと聞かされて居る。

今夏滿洲全般に亘るコレラの流行に際しての恐ろしさも正にこれに匹敵する。例へば滿鐵社員會發行の機關誌「協和」に報ぜられた處によつても、ある街角にコレラ患者が目も當てられぬ有樣で死んで居る。而も其處から一町とも離れずに露店で西瓜の切り賣りをして居る。勿論蠅が兩方に眞黑に集つてる事は云はずと知れた事。斯くて邦人防疫員の必死の努力にも拘らず病氣はドン〳〵流行する。

斯樣な事はあらゆる點に於いて見出さるゝ事なので例へば、滿鐵附屬地內の道路は特に路を壞す樣に造つたとしか思はれぬ支那馬車によつて年中、破壞され續けて居る譯で從つて支那馬車の通る限り附屬地內の道路と云へども雨の際は泥濘膝を沒する。

筆者の住居は附屬地の最北端。今匪禍、病魔の最盛期にあつて、ヒタスラこの接觸點の恐怖を味つて居る次第。



（二）庇宇亭の內部

# 女學校の理科室より

菅野生

滿六年の蠶の生活をやめて女學校の教壇に立つこと足かけ四年。現在は理科を担任し傍ら教務の仕事や一年生の主任をやつてゐる。

×

學校は省線中野驛西一丁。蠶業試驗場へは徒歩十分といふところ。御上京の際は是非お立寄り下さい。蠶界から離れて一人教壇に立つてゐると淋しい感もする。いつぞや針塚校長先生がわざ〳〵お訪ね下さつた時は涙の出る程嬉しかつた。

私の居る學校は東京府立唯一の高等家政女學校で其の內容は家政科と經濟科との二科に分れて居り普通學科は高等女學校と全く同じく其の上に各科獨特の科目—家政科は家事裁縫、手藝、園藝等と、經濟科は商業簿記、タイプライテング、珠算等を課してゐる。從つて毎週時間數も相當に多い。かやうな次第で社會大衆の要望にピツタリ合つて居り又女子教育の先端を行く感あり、志願者は年々實に多い。本年は百名募集に對し一千名の志願者あり不景氣知らずである。それで學校擴張案が自然に起り現在の三倍に學級を增加しその上に三年制の專攻科十學級を附設することとなつて着々進んでゐる。

×

生徒—試驗地獄の關門をくぐつて來ただけあつて生徒の素質は可成りによい。學力は勿論身體否容姿まで見事に揃つてゐる。斷髮は年々增加して行く傾向がある。この傾向を統計して曲線にでも表はしたら面白からうと思ふこともある。私の担任してゐるクラスは八割以上は斷髮だ。男子に比べて教へ惡いだらうと問はれることも度々あるが決してそんなことない。ハキハキしてゐて氣持がよい。最初は生徒の氣分が解らなくて困つたが今では大分馴れて生徒の心にピツタリ合ふ樣に教授を進めて行ける樣になつた。概して女生徒は暗記力が強い。考へることは割合に下手だ。「何々を箇條書に書け」なんて云ふ問題を出したら大抵滿點だ。

×

當校に來るや理科を担任させられたが農業科の免許狀一つでは心細かつたので文檢を受けることにした。幸ひにも昨年動物科に、本年生理衞生科に合格した。これ以外に植物、鑛物、化學、物理をやつてゐる。當校では先を見越して理科を二人で縱に割つて担任してゐる。何れ近い中に女學校の理科も中學校に準じて一般理科を課せられる樣になる。殊に女學校では一、二、三年まで一般理科を課し最上級で生理衞生を課する樣になるであらう。これは高等女學校長協會の意見だから。こんな譯で理科全般を教授するので忙はしい。從つてウント勉强もする。東京は勉强するのには實に都合よい。夏には大抵講習に行く。昭和四年には三崎の臨海動物實驗に—この時には先輩の竹內清氏と一緒でした。昭和五、六年は慶大の生理衞生の講習に。この講習は大變よい。余り氣に入つて二年續けて出た。蠶の生理を研究する人は是非受ける方がよい。色々なヒントが得られる。本年は東京工業大學の化學の講習で二週間午前は講義、午后は分析をやつた。又理科方面の會合等にはつとめて出席させて貰つてゐる。昨秋名古屋に開催の全國中等理化教員大會にも出席した。同窓が誰れも居ないので淋しかつた。

本年來る十月廿五日から五日間東京高師に於て全國中等博物教員協議會が開催される。この會には同窓の方々も多數御出席になられることゝ思ふ。大いに博物教育の熱を擧げやうではありませんか。

×

理科研究會—當校理科室內に私を中心として小やかな理科研究會が昨年生れた。會員は生徒の中で理科に趣味をもつ者で今では三十名程ある。例會は毎月一回第三木曜に定めてゐる。其の他に見學採集のピクニツクをも時々やる。去る廿五日には「秋の七草會」を催した。方面は小田急沿線の稻田登方で下車向ケ丘遊園地を中心に多摩川べりまで秋の千草を採集に出掛けた。又校內では色々な研究や製作をやつてゐる。昨年からインキと化粧水を造つてゐる。之等は秋のバザーに卽賣する。インクは非常によいものが出來る樣になり學校の購買部に於て販賣し一切他のインキを賣らないことにしてゐる位である。

## 向ケ丘にて

（一會員の作）

尾花の穗先を
細い綠を
口にくはへて
いつぞや田舍の
知らぬ小母さに
につこと笑つた
おもひ出される
なつかしいよな
多摩の川原へ
空がひろくて
うれしいうれしい

ついと拔き
ついと拔き
ツウ、ツウ、ツウ
丘の路
遭つた時
その顏が
凉しいやうな
味がする
來てみれば
ツウ、ツウ、ツウ
味もする

×

夏休み―毎年夏休みになると七月廿二日から十日間は山の生活か海の生活で暮らして了ふ。海の方は年々相州吉濱海岸にお寺を借りて半自炊生活をしてゐる。參加生徒は五、六十名それに教師數名。十日間の水泳で眞黑になつて歸る。山の生活は年年變へることになつてゐる。輕井澤富士吉田、箱根仙石原等に行つた。來年は何處？　未だ決定的ではないが嘗平にしやうかといふことになつてゐる。大變氣持のよい高原だと云ふことださうだ。嘗平に行く樣になれば暫らくぶりで上田の地を訪れることが出來るだらうと待ち樂しんでゐる。―（九月二十三日）―

# 高登闘に會ふて

福井　S　K　生

嘗て千曲時報に日本相撲界に異數の出世をなしつゝ有る高登闘と母校との關係に關した記事の掲載を讀んで高登闘は同窓吉川孟文兄の御兄弟なる事を知り一寸不可思議に思つて居つた者である。

と云ふのは吉川孟文兄は普通人より一寸小い方であつたのに（現在はいざ知らず學窓時代はそう御見受けして居つた斯く申上げては誠に失禮で有るが何卒御許るし下さい）兄弟でありながらそんなにも体軀の異つた者があるだらうかと。

北陸の本年の暑さは三十年來の暑さとか毎日水銀柱は上る一方で一〇〇度突破は毎日の樣で殊に濕氣多く釜の中で蒸される樣な八月上旬我が福井市に東京大相撲が二日間興行される事となり番附表が市中所々方々に貼り出された、その東方前頭筆頭に高登闘の名前を見た時なんとも云へぬ感に打たれた。

愈々初日の興行日を迎へたれば仕事の終るのを待つて相撲場へと飛び付け木戸で私は高登闘と同郷人ですと申込んだ所非常に打ち解けられ彼が相撲界に身を投ぜられた動機に就き一部始終話された。

丁度今より六年前忙しい秋蠶も終り黄金の波も漂はんとする頃信州南端の都飯田町にサイクルレースが催され長野松本上田方面から斯界一流のチヤンが乘込み前景氣は實に非常なもので有つた。

當時高登闘は家が蠶種業を營んで居つた關係上毎日の樣に母蛾檢査其他色々の用件で飯田の蠶業試驗場及び取締所等へ自轉車で通つて居つた故自轉車には相當の興味をもつて居つたからレースの當日之れを見物に是非面會させて戴きたいと申込んだ所心よく承諾されたから直ちに化粧室に趨いた所丁度大關能代潟との一戰が終り土俵より歸られた所で初對面の挨拶をすると喜んで會つて呉れた此の時一見して其の体軀の實に偉大で且つ筋骨逞しく其の堂々たる態度と紳士的應待振りには全く魅せられ横綱の貫録は祐に備はり居る事を知つた。

其の夜宿に訪問した所非常に打ち解けられ彼が相撲界に身を投ぜられた動機に就き一部始終話された。

丁度今より六年前忙しい秋蠶も終り黄金の波も漂はんとする頃信州南端の都飯田町にサイクルレースが催され長野松本上田方面から斯界一流のチヤンが乘込み前景氣は實に非常なもので有つた。

當時高登闘は家が蠶種業を營んで居つた關係上毎日の樣に母蛾檢査其他色々の用件で飯田の蠶業試驗場及び取締所等へ自轉車で通つて居つた故自轉車には相當の興味をもつて居つたからレースの當日之れを見物に行つたが或程度迄自信を有する彼は默視し居る事出來ず遂ひに飛入をしてスも出るレースも皆一等或は二等で斯界一流のチヤンと伍して出るレーで而かも彼のサイクルは競車でなく普通のブレーキ付きで全く見物人を一驚せしめた。

翌日の土地の新聞紙上に「未來の力士吉川渉氏自轉車競爭に優勝」と云ふ見出しで大々的に此の記事が掲げられた之れを見た土地の相撲世話人直ちに吉川家を訪れ是非角力界に入られてはとの談判然しその當時は彼の頭には角力などは殆んどなく且つ令兄二人は最高學府を出られ他出三人兄弟の自分はどうしても父母を援けて蠶種製造に從事せねばならぬと思つて居つた時で有るからそんな話には耳を傾けずに居つたがその後十日程經つて東京大角力が飯田町に二日間興行さるゝ事となり愈々興行の前日その幹部が吉川氏父子に對して手を代へ品を代へての說伏、然しまだ角力界に入る心はなかつたが其後毎夜の樣に力士にならうかどほしやうかと迷はされ又年老いた父はどんな考で居らるゝだらうかと思案に餘つて居つたがその後十日程經つて父上から「お前どほする心算だ」との質問が有つたので彼は卽座に「父上はどほ云ふお考で居られますか」と聞き返した所父としては「お前に力士になれともなるなとも云はぬお前の自由意志に任せる」との言葉此の言葉を聞いた彼は其の夜一晩中考へて考へ拔いた結果遂ひに力士にならうそうして名を天下に轟かそうと確い〳〵決心をし翌日父上に申上げると宜しい然し失敗をして歸る樣な事ならなぬがよい又上京するに際しての父の言葉及び昔蠶の友で有つた當時庭起の不眠不休の多忙時の事を思ひ出し緩まんとする精神に鞭打ち奮勵の結果とん〳〵拍子の出世僅か入界後六年實に異樣の出世振りと云はねばならぬ。

彼の偉大なる体軀とそうして堅固な精神とは必ず近き内に横綱は請合で有る。

同窓生諸兄……高登闘の令兄を同窓に有する諸兄――、蠶の力士高登闘が興行に行かれた節は御後援下さる樣そうして一日も早く斯界の最高位置に就かれる樣に御激勵あらん事を敢て御願して擱筆する。

# 浸湯酸人工孵化法の實用化に就て

（四）

愛知縣八名郡舟着村　柿田國三郎
紹介者　野澤泰治

第二回目控訴公判審理中東京の大震災のため書類燒失となり第三回目被告の公訴公判に於けるは大正十三年六月九日東京特許局審判廷に於て裁判あり竹村長義氏及私が證人となり、竹村先生は人格者にて論告に溫厚なれども私は業務の爲め過去に於ける人工浸湯酸孵化法の端緒より經過の一切を論述し辯明に務め、判官の尋問せざる證言に迄及び立證すると云ふ意氣を以て進んだ、丁度南設樂郡新城町太田洋具店の當座帳中に私共が註文した枠二十個の記載ある個所を見付けて論告したるに、最后には判官が黑白眞僞の別を認めし結果被告の勝訴となり、原告の桔川氏は尙大審院に控訴の手續をとり民事訴訟部の第七部に於て辯論の結果大正十四年二月十三日被告の勝訴に判決を得た登錄權利の消滅は吾々業者をして廣く此の方法を行ふに自由を得たのである。御氣の毒なるは桔川氏にして莫大なる費用を費し不名譽を殘した許りである。然も靜岡縣々會議員の名譽職にあり又靜岡縣有力なる蠶種製造家であつたが其の後業を廢して他に轉業したと聞いて居る。私も十三年六月九日裁判廷に出るに先立ち本縣知事（大田政弘氏）は特に留意さるゝ所ありしが新城蠶業取締所長を以て其の內命を傳へられ充分の注意を與へられ又蠶糸課に於ても課長（井口幹夫氏）の意を安藤技師をして傳へられ又前後事情を正確に調査さるゝ等の事もあつた、現に角此鹽酸を用ひて越年蠶種の人

ても村人から送別會などを開いて歡いてはならぬとのお言葉此の父にして此の子あり彼はどんなに辛い事があつても中途で歸る樣な事は決して致しません必ず天下に名を轟かせますと確く〳〵父上に誓つたので有る。

南信の秋も正に逝かんとし朝夕の寒氣一入身に泌み桑の葉がカラ〳〵と落ちんとする霜月の初め愈々上京する事に決心した彼は舊友三人と別れの盃を汲みかはしなつかしい父母及郷里を後に上京したのである。

上京後の彼は斯道に專心努力時たま非常に辛い事があつても出發當時

工廠化を行ふについては及ばず乍ら多少業界に御勸めした心算でありまして今は悴に蠶種製造業を讓り隱居して居ります。（完）

## 學籍異動に就て

本校卒業生又は修業生にして學籍（改姓、改名）異動に際し手續を取らぬため他から照會のあつた場合、卒業生又は修業生の資格證明の場合等に當つて學校として困却する事が時々あつて甚だ遺憾と存じます。就ては學籍の異動卽ち改姓や改名のあつた場合には戸籍抄本を添へ本校教務課宛速に御屆出下さい。

上田蠶絲專門學校教務課

## 佐久群馬地方巡回講演

### 校友會辯論部

嚴しかつた暑さも薄らいで來ました九月三日から七日まで第二回巡回講演に學生八名と共に出かけました。各地で卒業生皆樣の非常な御世話になり御盡力によつて講演會を御開き下され無事歸校の出來ました事を玆に深く厚く御禮申し上げます。

三日朝上田を發車し小諸で汽車を捨てガソリンカーにゆられるまもなく岩村田町に下車、峯村氏の出迎を受け北佐久農學校へ行き午后一時より第一回講演會を開き終了後校內を參觀致しました。中島氏の御來訪を受け一同鼻顏神社に詣で直ちに汽車を取つて信越線田中驛に下車。時午后六時直ちに田中製絲場へ行き午后六時より講演會を始め終つて座談會に移り十時五十分の汽車で歸田致しました。

五日は早朝より車中の人となり淺間高原をゆられながら甘藍の畑の間をぬふて群馬へと向ひ碓氷の險も談笑の中にすぎ展開されたは雨後の靑々しい上州の山野でありました。正午近く安中に汽車は滑り込むと小澄、今井兩氏の出迎を受け直ちに長い町と美事な杉並木をぬけて安中蠶絲學校へ着く。午后一時より講演會を開き終つた頃は雷鳴頻り大雨至らむとする形勢であつたが幸ひ示威に過ぎず再び兩氏の御見送りを受けて高崎へと走りつづけました。高崎の市中を通つて碓氷社についたのは午后五時頃。手塚氏の御案內で新工場を隈なく見せて頂き有益な御說明がありました。午后六時より例の如く講演會に移りその夜は市中に一泊致しました。

そぼふる雨に六日は明け前橋へ行つて工業試驗場に至り織田、石濱及び山田氏等に面會し場內の機械について詳細懇篤なる御說明を賜りました。やみかけた雨は再び姿を現はし直ちに富岡町へと向ひました。高崎から電車に乘りかへ山脈の間を西へ西へと進んで行くと甘樂社と原製絲の大きな煙突が目を引く。富岡だ！下車すると横田氏の出迎を受け甘樂社へ案內せられた。整備した新らしい工場の中を丁寧に御案內して頂き午后七時頃より最後の講演會を開き九時半頃閉ぢましてその夜はそこで一泊致しました。

七日は乘合で磯部に出て汽車を拾つて歸校致しました。顧みるに本校卒業の皆樣に絕大なる御援助と御親切な御敎示及び非常なる御優遇に與りまして御禮の申し樣もありません。

玆に深く感謝いたします。そして限りなき御心盡しの中に無事巡講の旅を終へました事は部員一同の喜びとする所であります。簡略ながら旅行記をしるして御禮の言葉と致します。（金子）

## 上田だより

月並の文句には候へ共燈火親しむべき候と相成候　諸賢の机邊には聖哲の名著專門の書籍等々山積致し居ることと存じ候、此の好期に於て母校も本月十二日より新學期を迎ひ職員學生元氣よく出揃ひ申し候、但し學生運動部の選手は八月廿日頃より登校致し思ひ思ひの場所を占據し合宿練習を始め炎熱猛暑もものかはと汗みどろの奮鬪を續け申し候。

此の雌伏二旬の成果は末尾に御報告致置き候九月は殆ど終始雨天勝ちにて陰鬱なる天候のみ打ち續き信州の秋に特有な淸澄透徹の碧空を仰ぐことも出來ずに十月を迎ひ申し候仲秋の名月も雨の中には姥捨の風情一しほわびしきよし風流人の失望さこそと被存候

學校を周る葡萄、胡桃、柿等の果樹もみな色付き申し候　近來學生はかなり大形な掠奪を爲し居り候が何れも雨のため不出來のよしかこち居り候

化學部敎授古谷榮藏先生は絹絲化學御研究のため佛國へ留學遊ばさるることゝ相成り來三月出發の御豫定のよし承はり候

生徒主事として御就任後未だ幾許も無き井上先生は今回勅任敎授に叙任遊ばされ候に付き官制上生徒主事は自然消滅となり金子先生が此の後を襲ふことと相成り候井上先生御在任中學生の綿密なる學資調査を行ひ最低生活費を算出し各父兄に之を通告して豊富なる學資を呼び稍貴族的に徒消せし學生の度膽を寒からしめたるは餘りにも有名なる逸話と相成候溫雅共のものの如き先生によりて授ぜられし一石が學生間に近來にない大波紋を描き動搖を來せしめしは頗る痛快のことと存じ候

長らく庶務課長として令聞名聲をうたはれし白頭翁小澤綱吉氏は功成り名遂げて後進に道を讓る可く隱退遊ばされ候、湘南の御鄕里に自然を友として老後を養ひ給ふよし吾等は衷心より永年の御努力を多とし將來の御多幸を祈福仕候共の後任は同課に長らく在職されし新進氣鋭の士若林三郎氏に有之候　同窓會に最も馴染み深き田玉氏が庶務課に轉ぜられ候が本會との關係は從來通りと御承知被下度候

養蠶科二年學生箱山六郎氏は本夏前橋市蠶業試驗所に於て校外實習中腸チブスに罹り市立病院に入院致し約四十日に亘り加療仕り候も　藥石遂に効無く此程死去被致候上中出身の駿足として非常に將來を囑望され苦學營々辛く業中半に達つしたるにかゝる不慮の病魔のため一偉才を失ふは返す返すも殘念至極と存じ候職員學生一同半日を休み葬送仕候本件に關し在橋の先輩諸氏には非常に御心勞相煩はし候よし厚く御禮申上候

次に運動競技の模樣一括御報告申上候以下各運動部學生の草になるものに有之候（倉澤生）

## 劍道部より

拜啓　高天肥馬の好季節と相成候處諸兄愈々御健勝之段奉大賀候　我部も諸兄の絕大なる御聲援により日々隆盛に趣き御同慶の至りに存候

偖毎年の例に依り去る九月十八日松高に遠征仕り幸にして快勝致し大に劍道部の意氣を示し候　次で永く中絕せる東京高蠶より試合を申込來り候間我部とても願つてもなき幸にて且つ又松高との快勝にて益々元氣旺盛なる部員は得たりと計りに心よく引受け九月二十三日午前十時より本校に於て試合致し候　格段の相違にて難なく擊退仕候　是れ一重に先輩諸兄の不斷の御熱援の賜と部員一同深く感謝致し居候　戰績を御高覽に供し度左記に御通知申上候希くは諸兄が劍道の意氣を以て各方面に御奮鬪あらん事を祈上候　敬具

昭和七年九月二十四日

上田蠶絲專門學校々友會劍道部

審判　和佐田氏（松本二中）

個人勝負（三本）

| | | | |
|---|---|---|---|
| 松高5 | | | 7本校 |
| 成宮○ | | | ○○池田 |
| 佐々木○ | | | ○○宮尾 |
| 西澤○○ | | | ○中村 |
| 出澤○○ | | | ○益淵 |
| 神林○○ | | | 中會根 |
| 等々力 | | | ○○伊藤 |
| 守屋○ | | | ○○六川 |
| 和佐田○○ | | | 淺川 |
| 北原○ | | | ○○田ノ上 |
| 飯沼○ | | | ○○深井 |
| 長谷川○ | | | ○○杉浦 |
| 靑木○○ | | | ○寺井 |

紅白勝負（三本）　審判　同　前

松村・高宮・池田　本校
成宮・佐々木・宮尾
酉澤・澤中・村
田澤・益淵
神林・中曾根
等々力・伊藤
寺屋・六川
和佐田・澁川
北原・田ノ上
飯沼・深井
長谷川・杉浦
青木・寺井

補缺　藤井・三宅田原

審判　伊藤長三氏（上田）

個人勝負（三本）

東蠶　7本校
松村　○○中村
照屋　○○池田
安中○○　中曾根
井上○　○○六川
神谷○　○○伊藤
山田　○○澁川
大島　○○田ノ上
竹村○○　○深井
田中　○○杉浦
佐々木○・—×—○寺井

審判　同　前

紅白勝負（三本）

東蠶　本校
松村・中村
照屋・池田
安中・中曾根
井上・六川
神谷・伊藤
山田・澁川
大島・田ノ上
竹村・深井
田中・杉浦
佐々木・寺井

## 柔道部より

堅城不拔の我柔道部も三月十五日を最後として大半の選手を活社會へ送り出し傾城の惱みに包まれて居たも瞬の間にして春風に全信州の山野を櫻花に包む四月多士奔々の新入生諸君を我部に迎へるや若人の血潮は高鳴り都の花を外にして肉彈相搏つ野叫びの聲は夜燈ちらつく剛道場の中からもれて居た。

若人の意氣と熱はいやが上に高鳴り破堤の勢制し難く遂試合を山梨高工に申込めば彼心良く承諾せり、當時選手の喜びや筆舌に盡し難く高鳴る腕を制しつゝ旅裝整へ五月二十七日午前十二時立田驛發の列車に乘込む、母校を愛する者此時期せずして集り在校生の名物男三宅君我選手一行の戰勝を祈るべくパッパッの躍りに選手一行必勝の決意を面に漂はせ送る者送られる者何れも感激の中に列車は靜にホームを離れた。當日は一泊し明る二十八日旅館差廻しの自動車に分乘し山梨高工の道場に乘込んだ次に試合成績の概要を記せん。

山梨高工　上田蠶專

先峰　長田—×—平岡
（二段）清水—金丸◎
鈴木—山本
住野—橋本
（二段）宇佐美—本居（二段）
○中山—小松○（二段）
飯島—市原
（三段）工藤—向井
○池田—山本（金二段）
大將二段上垣—×—喜多尾（二段）

斯くして主將喜多尾君の出場を見ずして凱歌は我に擧げらる。猛獸の如き顏をして居る一行も急に童心の如き和らかさに歸へり、互に戰功を賞し合ひつゝ宿舍に引揚げる光景とそ青春ならでは味へぬ力强さであつた。

山梨高工にて十分自信をつけた一行は破竹の勢にて東京高蠶の道場に乘込む時五月二十九日審判、三船八段、飯塚八段の下に開始さる戰績次の如し。

東蠶　上蠶

先峰　關口—橋本○
高橋—市原◎
平岡—本居◎
東海—喜多尾
小海—小松
牧野—向井
水田—金丸
山本—關原

斯くして我校は五名を殘して大勝せり、次で個人勝負にうつり之れ復全勝せり。

東蠶　上蠶

高橋—平岡○崩レ上四方
關口—向井○左ハネ腰
東海—市原○足拂
小海—橋本○押込
水田—小松○大外刈
平岡—山本○送リ襟
關原—喜多尾○内マタ

## 通信

### 大畠秀氏の訃

拜啓時下秋冷の候諸兄益々御健勝の段奉大賀候野生事御蔭を以て無異相勤居候間乍他事御休神被下度候

却説こゝに悲しき御報告を致さねばならぬ事を甚だ遺憾に存ずる次第に御座候實は本縣立蠶業學校に在任せられし大畠秀君（糸四）は六月頃より胃潰瘍（後に胃癌と診斷せらる）の爲病臥せられ一時夏期休暇前頃は一寸快方に向ひ三日許り學校へ御出勤せられし位なりしも再び病重り九月初京都大學病院に入院されて凡二週間手術も試みられんとする矢先病更に改まり衰弱も大に相加はり遂去る十八日忽焉として他界せられ候兄享年四十三才中學二年の坊チャンを頭に小學校行一人、乳呑子一人都合三人の遺兒有之誠に御氣毒に堪へず候本日午後宇治山田市中島町なる自宅に於て告別式有之小生同窓生の代表の意味もあり特に同期生の故を以て式に臨み謹んで同君の冥福を祈中候御家族は近日中同地を引き拂ひ原籍に歸へられて本葬せられる由に候支部幹事橋本君からも無論御通知有之事と存候へど小生告別式にまゐりし關係も有之候へば一寸御知らせ申上候

右御報告まで　早々

九月二十日　田中康雄

千曲會本部各位

## 叙任辭令

地方農林技師　芝荒雄

九給俸下賜

公立實業學校教諭　中山鑑一

年功加俸年額百四十四圓下賜

正五位勳五等　大瀧照太郎

叙從四位

公立實業學校舍監　工藤一二三

愛知縣渭郡農學校舍監ニ補ス

加俸年額六〇圓下賜

公立實業學校教諭　吉野健吉

年功加俸年額百五十七圓下賜

德島縣立農業學校教諭　宮坂正彦

公立實業學校教諭ニ任ズ

高等官七等ヲ以ツテ待遇セラル

八級俸當分千四百四十圓下賜

上田蠶絲專門學校教授　古谷榮藏

絹絲學研究ノ爲佛蘭西國ニ在留ヲ命ズ

德島縣立小松島高等女學校教諭　内川勇

公立高等女學校教諭ニ任ス

高等官八等ヲ以テ待遇セラル

德島縣立小松島高等女學校教諭ニ補ス

八給俸當分一千參百參拾貳圓下賜

地方農林技師　丸山武夫

新潟縣農林技師ニ補ス　小澤綱吉

願ニ依リ囑託ヲ解ク（九月七日）

長野縣青年講習所長　鄉原保

講師ヲ囑託ス（十月四日）

## 住所移動及訂正

岩本市郎　蠶一　松山農業學校（松山市）

波多野千里　蠶一　西條農業學校（愛媛縣西條町）

小見益男　蠶三　化學絹絲研究所（東京府荏原郡南品川町品川宿一、四三八）

富岡泰　蠶六　宮崎縣廳内宮崎縣蠶業取締所（宮崎市）

後藤仙彌　蠶九　平川里原蠶種製造所（平安南道平城府）

金澤丈也　選蠶十二　青森縣三戸郡五戸町

永井勝末　蠶十四　東京市池ノ端仲町十八芝方

姜景喜　選蠶十六　遂安郡廳（朝鮮黃海道）

金相熹　蠶十七　普州公立農業學校（慶尙南道）

竹内直人　蠶十八　長野縣小縣郡和村海善寺

尾崎利雄　蠶十八　岡山縣廳内岡山縣蠶業取締所（岡山市）

今井武四　蠶十九　農林省蠶絲局蠶業課（東京市麴町區大手町）

竹内博男　蠶十九　昭和產業株式會社

平良堀養蠶所（鹿兒島縣鹿屋町）
上原　安夫　蠶十九　東京府立川町）
立川支所（東京府立川町）
石曾根　岬　蠶十九　郡是製絲株式會社
成松工場（兵庫縣氷上郡成松町）
濵村　一彦　選蠶十九　昭和產業株式會
社船迫養蠶所（鹿兒島縣鹿屋町）
矢田部忠吉　糸　二　姫路市城東町五軒
邸矢田部茂三郎方
長野　充博　糸　三　熊本縣縣菊地郡隈
府町亘
古郡　友一　糸　七　忠南製絲株式會社
（忠清南道禮山郡禮山面）（訂）
井原　邦雄　糸　十　伊藤重次法律事務
所（東京市麴町區丸ノ内二丁目十四
番地仲通十一號舘ノ一）
坂路　善一　糸十一　東京府下西巢鴨町
宮仲　二、八七七（訂）
南林　孝三　糸十三　鐘紡製絲工場（島
根縣簸川郡大津村）
相澤　仲司　糸十三　鐘紡甲佐製絲場
（熊本縣上益城郡甲佐町）
井立喜三郎　糸十三　神戸生糸檢査所
（神戸市濱邊通）（訂）
深澤　潔　糸十八　長野縣廳蠶糸課
（長野市）
成尾喜八郎　糸十八　肥後製絲株式會社
豊田工場（熊本縣下益城郡豊田村）
野田太郎　糸十八　大分縣東國東郡武
藏町
原井　國男　選糸十八　熊本縣繭檢定所
（熊本市出水町）
橋本　和夫　紡　六　本校絹糸紡績科
谷津　尚　紡　八　神戸生糸檢査所
（神戸市濱邊通）
和田　貞政　紡　十　長野縣更級郡桑原
村
中森　謹二　紡十一　近江帆布株式會社
味野工場（岡山縣味野町）
川島　信夫　紡十一　津市岩田川口九八
番屋敷
小笠原安重　蠶　二　京城公立農業學校
（京城府外清凉里）

## 新刊紹介

### 日本農業年報　第一輯

右は本會々員確氷茂君外六名の執筆になるもので四六判五四二頁に亘り第一輯に於ては特に「農業恐慌の全面的展望」と云ふ題で編述せられたものである。昭和七年九月廿日改造社の發行で定價は壹圓貳拾錢である。

本輯は從來一部の人々にのみ注意され又理解されて來た我が國の農業問題を一般の理解にまで推し擴めたいといふ希望の下に生れたもので從つてそれは事實の報道とその說明とを主眼とし之に若干の批判を附け加へたものである。その內容の豊富と他に期待出來ぬ新鮮さを持つて居る事は著者の自ら任ずる所でその序にも書いてある。次にその目次並に例言を示せば次の如くである。

目次


第一部　恐慌下の農村　一
第一　慘たり！　農民生活　三
第二　五・一五事件と
農村問題の沸騰　五四
第二部　日本農業恐慌の本質　七三
第一　日本農業の實體　七五
第二　日本農業恐慌の本質　一一四
第三部　恐慌の事實の分析　一三一
第一　價格の激落——
シェーレの擴大　一三三
第二　農村の巨大負債と
地方金融破綻　一五八
第三　租稅、公課負擔の重壓　一九〇
第四　出稼・歸村・
失業・賃銀低下　二一八
第五　農業に對する
諸資本の進出　二四〇
第六　苦難の蠶絲業　二六四
第七　農蠶經營に於ける
矛盾の發展　三〇六
第四部　恐慌を基底とする
農民の諸動向　三二七
第一　尖銳化せる小作爭議　三二九
農民政治運動の急轉向——
ファッショ化的動き三四四
第二　破綻に瀕せる農村教育　三七四
第三　農村に於ける節約の强行三八三
第四　農村恐慌諸對策　三九一
第五　インフレイション——
平價切下げ　三九三
第六　負債並金融對策　三九六
第七　負擔對策　四一〇
價格政策　四二〇
增產政策　四六七
第八　失業對策としての
土木事業　四八〇
北海道・東北・沖縄地方に
於ける凶作對策　四八六
附錄　自力更生策　四九七
滿洲の農業と
日本農業移民　五〇三
第一號　滿洲の農業　五〇五
滿洲の農業と
日本農業及移民
第二號　重要農政日誌　五二一
附錄　重要農政日誌　五三一


例　言

一、本年報は今後毎年二回半年毎にする豫定である。從つて各年共前半期は九月上旬後半期は翌年三月上旬には遲くも世に出したい心組である。

一、此の年報の內容に就いては立前として今後常に其期に於ける一般的事情を詳錄すると共に他方一つ二つの特殊な問題を特に深く研究し發表したいと思つてゐる。例へば米穀問題、特約生產問題等々。

一、本輯では第一輯たる關係及び社會的事情を考慮して特に本期に於ける問題以外の基礎的諸問題をも取扱つて置いた。これは讀者の便利のためにも又年報としての使命の上からも絕對に必要であつたからである。

一、目下の所次輯に於ては植民地農業問題として書きたいと思つてゐる。滿洲問題も大躰の目鼻が——聯盟關係に關する限り——つきさうであり植民地農業の本國農業に對して有する意義を深く討究して置く必要があるからである。

### 弔慰金募集廣告

本會々員大畠秀氏（絲四）豫而御病氣の處養生不相叶九月十八日遂に御逝去被致候間此段本紙上を以て及御通知候也

追而有志弔慰金は來る十一月末日迄に取纏め遺族へ贈呈可致候間便宜上振替口座東京第四三三四一番へ大畠秀氏弔慰金の旨御明記の上御拂込被下度候

昭和七年十月十五日

上田蠶絲專門學校
千曲會

故佐藤久太郎氏
弔慰金追加

金貳圓也　吉川誠彦
合計　金參拾五圓五拾錢也

遺族贈呈料　金參拾五圓五拾錢也
昭和七年九月十七日
上田蠶絲專門學校千曲會

## 編輯室より

編輯者がかわりましてもう半年たつてしまひました。活字の大きささへ知らなかつた編輯子もお蔭樣で少しは馴れて來た樣です。これ偏に各位の御指導御鞭達によるものと深く感謝して居ります。

限られた豫算に限られた紙面そこに成るべく多くの記事を載せる事に多少の無理もあります。その爲に寄稿者各位に御迷惑を掛ける事もあらうかと存じます。何卒御寬容の上相變らず御寄稿の程お願ひ申します。

今迄編輯者が勝手に取計つて居りました事は次の二點です。

原稿の提出年月日古きものは新しきものより成るべく先に發表す。

時期の問題につきての原稿は遲く提出せしものも先に發表す。

凡そ右の樣な心持でやり來つて居りました。何卒御含み下さい。

十月號には特に本校校友會各部から原稿を頂戴いたしました。お蔭樣で紙上光彩を添へる事が出來ました事は讀者一同感謝する所であります。只紙面の都合で陸上競技部や庭球部などの記事は翌月廻しと致しました事は誠に遺憾と存じます。

比宇亭の寫眞は此の前秋山巡視の記念碑を撮つて頂いた山口定次郎氏にお願ひ致しました。また卷頭菅平の白樺の寫眞は特に小林寫眞舘の寄贈されたものです。此處に記して厚く感謝の意を表します。